

〈書評〉

カトリーヌ・マラブー著 平野徹訳

『明日の前に——後成説と合理性』

(人文書院、2018年)

相原 博

本書は、超越論的なものの後成説という観点から、カント哲学を脱構築する試みである。マラブーによれば、メイヤサーの思弁的實在論が登場し、神経生物学が発展したことで、超越論的なものは放棄されつつある。だが超越論的なものが「発生し変化する」と考えることで、思弁的實在論と神経生物学の批判から、超越論的なものを救い出すことが可能になるという。

もう少し詳しく見ていこう。なお書評者は、仏語の素養が十分でない。そのため、原書(C. Malabou, *Avant demain: Épigénèse et rationalité*, Paris 2014.)との照合はほぼ省略している。考察の出発点となるのが、『純粹理性批判』第二版の §27に登場する後成説の読解である。

さて、経験と経験の対象にかんする概念とが必然的に一致すると考えられる道は、二つしかない。経験がこれらの概念を可能にするか、これらの概念が経験を可能にするか、いずれかである。前者は、カテゴリーにかんして成り立たない(また純粹な感性的直観にかんしても成り立たない)。というのは、カテゴリーはアプリアリな概念であり、したがって経験に依存しないからである(経験的起源を主張することは、ある種の自然発生論であろう)。それゆえ後者だけが残る(いわば純粹理性の後成説の体系である)。(KrV, B166f.)

後成説はもともと生物学の用語で、生物の発生や発達について、単純な部分から複雑な部分が形成されていくと主張する。この後成説が、なぜかカテゴリーの演繹の議論に登場している。マラブーによれば、後成説によってカテゴリーと対象との一致が思考可能になるならば、超越論的なものにも「変化の可能性」がなければならない。しかしながら、超越論的なものの「変化の可能性」は、そのアプリアリ性と矛盾するように思われるのである。この引用箇所をめぐって、これまでの読解はおおよそ二つの立場に分かれる。一つは、最小であれ、前成説を認めるものである。すなわち、後成の作用は経験を機縁にして発生するが、その構造については、経験から何も受け取らない、という読解である。もう一つは、後成説が超越論的秩序と折り合えないと主張する。そのため、カテゴリーと対象との一致は、ダーウィンの理論における進化、生物学的適応によって説明できる、という読解である。このように、いずれの読解も十分ではない。

そこでマラブーの考察は大きく転回する。後成説は、カテゴリーと対象との一致がアプリアリに産出される過程を説明するだけでない。むしろ後成説は、「主体化の次元」を特徴づけており、主体がこの一致の産出を理解することも可能にするという。すなわち、

§27を説明するには悟性に自発性があるとすればよく、事後の効果を顧慮する必要はないとする態度、悟性の主体は自己解釈をつうじて純粹に産出されるとする態度は、超越論的なものの本質的次元の一つをなす超越論の後成説の主題を切り捨てることにつながる。すなわち、主体の自己

形成としての起源の自己所有化という主題の切り捨てになる。(本書、178頁。一部訳語を変更。)

こうしてマラブーは、フーコーの系譜学を手がかりに、カテゴリーと対象との一致の問題が、主体の自己形成の問題から切り離せない指摘する。マラブーの見解によれば、フーコーの系譜学は、基礎づけの欠陥から出発して、合理的なものが発現する場所を特定しようとする。そのため、起源の不在という「資力」が超越論的なものを規定することになる。それを言い換えれば、後成説は「起源の不在から生まれた起源」である、というのである。しかし、最終的にフーコーは、超越論的なものの最小限の定義として、「残滓」という選択肢を提示する。「残滓」は後成説と相容れない。それゆえ、フーコーの系譜学も放棄されることになる。

それでは、後成説はどう理解すべきなのか。マラブーの考察は、ハイデガーによる時間性の存在論にむかう。ハイデガーにしたがって、超越論的なものを「根源的時間性」として理解すれば、構造であるとともに運動でもある、超越論的なものの特性の描写が可能になる。換言すれば、根源的時間性という理解だけが、超越論的なもののアприオリな後成を説明するのである。しかし、その妥当性を認めつつも、マラブーはハイデガーの解釈にしたがわない。というのは、根源的時間性という理解が、生物の発生や発達にかかわる、「自然的で客観的な時間」を説明できないからである。そこでマラブーは、「後成説の論理」を形成すべきと考え、カントとともに、合理性の後成的パラダイムの概念を提示する。それは、カント哲学と現代のエピジェネティクス研究との接続を手がかりに、『純粹理性批判』から『判断力批判』にいたる「批判自体の発生や発展の過程」を、後成的な発生として読むことを意味する。すなわち、超越論的なものの後成説を認めて、超越論的なものが後成的作用にしたがうと読むのである。そして §27の読解について言えば、

§27が導入した「純粹理性の後成説の体系」という考えを内的発展の過程のはじまりとみなす、ということである。一つの〈批判〉から別の〈批判〉への自己分化/自己差異化(*autodifférenciation*)によって作動し、みずからの創造的、形成的、変形的源泉から発して、自身の外の諸力を巻きこんで進行する内的発展、これを後成説の体系とみなすことである。(本書、295-296頁。)

このように、生物の発生や発達と同じように、未来を先取りし、過去へさかのぼろうとする後成的作用のもとで、カントの批判哲学も解明されるのである。

後成説のこうした読解によって、思弁的实在論と神経生物学の批判から、超越論的なものを救い出すことも可能になる。メイヤスーによれば、§27で検討されるような、思考と対象との一致の原理は正当化できない。むしろそれは事実として成立しているだけである。その意味で、超越論的なものは偶然的である。それゆえ問題は、私たちの経験と無縁である「まったく別様の世界」を思考することになる。しかしながら、マラブーによれば、カントは「まったく別様の世界」に反対しない。理性の後成説の発展は、必然性のさまざまな水準を出現させて、偶然性の意味を変化させている。もはや偶然性は、メイヤスーが理解したような、別様であることができる能力の同義語ではない。むしろ「存在という、正確には同一のものに帰結しないものの避けえない事実性の同義語」である。したがって、カントは「根源的な偶然性」を認めている。また超越論的なものの生物学化について、適応や進化、遺伝という考えは、超越論的な構造という考えと相容れないように思われる。そこでカテゴリーの起源を神経生物学的に解明しようとするれば、後成説の主題

は哲学から奪われ、後成説から超越論的な意味が失われてしまう。しかし、マラブーによれば、思考活動や合理性を神経系の働きとして記載しようとする考えに、カントは反対しないはずである。現代のエビジェネティクス研究によれば、脳はプログラムのもとで作動する器官ではなく、後成的な作用に開かれている。そして、超越論的なものの後成説も、理性の後成的な発生や発展を認めている。それゆえ、神経生物学と批判哲学は「対等の関係」にあり、その知見を相互に交換できるからである。

議論はおよそ以上のとおりである。それでは、本書はどのように評価できるだろうか。本書は、神経生物学の発展を真摯に受け止め、それと両立可能なものとして批判哲学を読み直す試みである。今日では、適応や進化、遺伝にかんする科学的解明が進み、その知的な影響力は、哲学や倫理学の分野でも無視できないものがある。にもかかわらず、批判哲学の研究はテキストの読解にとどまり、科学の発展と断絶しているように思われる。そうした状況が事実であるとすれば、マラブーの試みは肯定的に評価できるだろう。彼女の試みだけが、批判哲学を神経生物学の研究に開かれたものとし、両者の共同作業を可能にしたのである。また批判哲学の研究についても、マラブーの試みは、『判断力批判』とりわけ「目的論的判断力の批判」を、批判哲学の核心部に据えたことになる。生命現象にかかわる第三批判が、まさに超越論的なものを解明する鍵になるという。こうした解釈は斬新で、これまで存在しないはずである。しかし他方で、本書の見解は、カント解釈としてどこまで妥当であろうか。残念ながら、生命の概念にかんして、書評者の疑念が晴れることはなかった。マラブーによれば、生命は批判の「外部」として、超越論的なものを変容させる要素である。

超越論的なものと生命との異質性の解消は、まさしく、カテゴリーやその対象との関係とともに進むと同時に、後成的な作用にしたがう。じじつ、第一批判から最後の批判にかけて、超越論的なものと生命の関係の構造は進化し、複雑化し、変転を遂げている。(本書、297頁。一部訳語を変更。)

しかし、『実践理性批判』で語られるように、生命は「実践的な概念」であったはずである。靈魂論の批判とともに、生命の概念は理論哲学から実践哲学へ、その居場所を変えることになった。そして、有機的存在者にかんしても、カントは「生命の類比物」と呼ぶことはあるが、生命の存在を決して認めなかったはずである。カントは、理論哲学で確立した物質の概念に忠実であり、『判断力批判』でも物活論を警戒していた。この内在的な議論を考慮すれば、たとえ脱構築といえども、マラブーはテキスト上の根拠をもう少し重視すべきではなかっただろうか。そのため本書の評価は、肯定派と否定派で大きく分かれるように思われる。神経生物学や脱構築の思想の立場から称賛する意見もあるだろう。また思想史研究や内在的な立場から非難する意見もあるだろう。どちらが正しいのか。本書を紐解き、読者自身が判断されることを薦めたい。